

「常識」「通念」の壁の外に出てみよう

三輪芳朗

Malign or benign neglect とでも呼ぶべき collective action に直面しなければ、本書の内容は、広範な「読者」の強い反発と批判を招くだろう。第二次世界大戦終了直後に各国について支配的になった「通説」「常識」「通念」(さらに、その帰結でもあり、結果として各国で発生し存続した「臭いものにフタ」とでも呼ぶべき状況)に対して見直しを提起した多くの著作が各国で直面した命運と同様である。歓迎すべきだろう。

今春刊行の拙著『計画的戦争準備・軍需動員・経済統制——統「政府の能

力』(有斐閣)のIntroductionの一部である。一九三〇年代半ば〜一九五〇年代初頭の時期の日本については、「戦争」「統制」「計画化」と「占領」「混乱」「民主化」などをキーワードとする図式的理解が「通説」「常識」「通念」として今日も圧倒的・支配的である。このため「通念」に挑戦しこれと直接衝突するものはもちろん、企業行動や経済システムの運行の実態、「計画」を含む経済政策の実像と有効性の冷静な検討さえも、歓迎されず、実質的に圧迫されてきた。「圧迫」は、関係資料などの収集・保存状態の悪さ、研究成果に関心をもつ専門研究者の少

なさ、「通説」を支持する多数の専門研究者の存在と行動、「通念」以外の見解・主張に耳を傾ける(潜在的)読者の乏しさ、そして発表機会の乏しさなどによる。第一回冒頭で拙著に与えた「商業的採算見通しの暗い本格的研究書」という表現は、この状況を反映する。

『計画的戦争準備・軍需動員・経済統制——統「政府の能力』の象徴的要約

ちなみに、本書の検討結果は、象徴的には次の三点に要約できる。

(1) 極端な「準備」不足状態で日

中戦争が開始され展開された。「戦争」開始後の「軍需動員」「経済統制」の実態・performanceもはなはだ不満足な状態のまま推移した。日中戦争開始四年半後に開始された太平洋戦争についても同様である。

(2) 「計画的戦争準備」「軍需動員」「経済統制」の基礎となりこれらを条件づけた日本「政府の能力」ははなはだ貧弱であった。「有能な政府」が持てる「能力」の発揮に失敗したと考えるべき理由は見あたらない。

(3) 「軍需動員」などに関する「通説」「常識」「通念」は日本「政府」が卓越した「能力」を有したとする誤った仮定の上に成立し受容され続けてきた。「計画的戦争準備」「軍需動員」「経済統制」に関する「通説」「常識」「通念」は誤解であり、実態から乖離した神話である。

ドイツ第三帝国政治・経済体制の 見直し

実際、日本に先行して各国で進展した同じ時期の状況に関する本格見直しの開始は、例外なく重大な障壁・抵抗に直面した。

第二次世界大戦開始以前から、イギリスを中心にして、ヒトラーは一貫してオーストリア併合、チェコスロバキア解体、そしてソ連侵略、つまり「東方帝国」の形成を目的として追及したとする支配の見解が形成されていた。一九六一年刊行の『第二次世界大戦の起源』でオックスフォード大学のA. J. P. Taylorはこの見解に真っ向から挑戦した。再軍備に関して一九三六年春まで「再軍備はほとんど神話にすぎなかった」とするアメリカ人の研究を参照して、「ヒトラーは計画的に戦争を目指したか？」と問い、「綿密で首尾一貫した計画に従ったというよりも、事件を利用した」と結論した。ナチ・ドイツの戦争責任を否認したものとするドイツのネオ・ナチ派の歓迎を別にしても、にぎやかな「Taylor 論

争」に巻き込まれた。

一九六四年刊行の第二版で冒頭に追加された“Second Thoughts”を次の文章で始めた。

私の歴史的探究心を満足させるために本書を執筆した。成功した歴史家の言葉を借りれば、「実際に生起した事柄、およびその原因を理解する」ために書いたのだ。歴史家はしばしば実際に生起した事柄を好まず、それが異なっていて起こっていたらよかったと願う。だが彼等がそのために何かをなし得るわけではない。彼らは見たままの真実を語らなければならない。既存の先入観にショックを与えるかそれを確認するかを気にしてはならない。……私は歴史を裁こうとしているのではないと読者に注意しておくべきだろう。

シェフィールド大学歴史学教授 Ian Kershaw の *The Nazi Dictatorship* :

日本の地方政治

—二元代表制政府の政策選択—

菅謙悟／待鳥聡史 著 比較政治制度論からのアブローナチにより、知られざる戦後地方政治の政治的ダイナミクスを描き出し、地方政治論に新たなフロンティアを拓く画期的論考。 5040円

民主化の韓国政治

—朴正熙と野党政治家たち 1961-1979—

木村 幹 著 野党政治家の挑戦と挫折、そして金泳三・金大中ら新しい世代の登場——民主化の成否を分けた前提条件を、朴正熙政権期から浮き彫りにした刮目の政治分析。 5985円

アメリカ先住民の現代史

—歴史的記憶と文化継承—

内田綾子 著 20世紀の揺れ動く連邦政策のなか、国民共同体の風刃に立ちながら自らのアイディアを再構築してきた先住民の政治・文化戦略の軌跡を浮き彫りにする。 6300円

アトランティック・ヒストリー

B・ベイリン 著 和田光弘他訳 大西洋を舞台としたトランスマシヨナルなヒストリとモノのダイナミズム。歴史学最新のパラダイムの全貌を、アメリカ史学の泰斗が浮き彫りにする。 2940円

マキアヴェリアン・モーメント

—フレイレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統—

J・G・A・ポコック 著 田中秀夫他訳 新たな思想史の可能性とともに、シヴァイツク・ヒューマニズムの軌跡を掘り起こし、絶大な反響をよんだ記念碑的名著。待望の邦訳。 8400円

名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋千種区不老町名大内
TEL052(781)5353 / FAX(781)0697

Problems & Perspectives of Interpretation がドイツ第三帝国の政治・経済体制に関する今日を代表するテキスト・ブックの一つだろう。初版が一九八五年に刊行された本書は、二〇〇〇年に第四版が刊行された。次はこの書物の最後の文章である（一九九三年の第三版のものが第四版でも維持されている）。

ナチの過去はそれに直面しなければならぬ人たちに道徳的非難（moral denunciation）の強い感情を引き起こす。正しい（right）ことだ。とはいえ、そのような感情

が正当であり必要であるとしても、道徳的非難では長期的に不十分である。理解（understanding）よりも、伝説の一部（the stuff of legend）になりかねない。道徳的な激怒や憎悪は純粋に歴史的研究や理解によって補足し続ける必要がある。過去が現在を規定する。ドイツで、常にはないとしても否定的なやり方でのみ過去が現在を規定していることはあまりに明確だ。

……知識は無知に優り、歴史は神話に優る（Knowledge is better than ignorance; history better than myth）。人種的不寛容やファ

シズムの幻想と白痴の復活が無知や神話から発生しつつある現状でこそこれらの自明の理は念頭に置くに値する。

基本的パズル

「そんなことは当然だ……」と断言する読者も、「とはいえ、アタマでは了解しても、イザとなると……」と不安になるだろう（このような不安も抱かない読者は、「赤い実を食べたのではないか……」と自省しないし、アテナにならないと考えることにしている）。「通説」「常識」「通念」の高く厚い

堅固な壁の外側へ読者を誘導し脱出させ、『青い鳥』にも関心を持たせるために、大部の研究書の前半（第1部）を「通説」「常識」「通念」の徹底的批判と破壊に費やした。批判と破壊への参加こそが読者の「常識」「通念」の呪縛からの脱出・解放に有効だと考え、第1部後半を、第3章『通念』を支持する読者のための『戦争』に関わる一〇の基本的パズル」と第4章『通念』を支持する読者のための『計画的戦争準備』『軍需動員』『経済統制』の実相に関する九つの基本的パズル」とした。

第3章の目次は次のとおりである。

- 3・1 「物的生産力」に関する「冷厳な数字（『The Cold Figure』）」
- 3・2 太平洋戦争は「計画的戦争準備」に基づく「戦争」の一環か？
 - 3・2・1 計画者が想定した対米戦争勝利（目的達成）の主要手段は何か？

- 3・2・2 計画の実現手段、実現可能と考える根拠は何か？
- 3・2・3 日中戦争開始時より対米戦争を想定して「計画的」に準備したか？
- 3・2・4 太平洋戦争開戦時、戦争終結の「計画」・見通しを有したか？
- 3・3 「武力行使を伴う南進政策」は「計画的準備」に基づく「戦争」の一環か？——（1）石油等の南方資源の確保
 - 3・3・1 「武力行使を伴う南進政策」：「計画」の内容と帰結？
 - 3・3・2 「武力行使を伴う南進政策」による石油等の資源確保は実現可能な目的と考えられたか？
- 3・4 「武力行使を伴う南進政策」は「計画的準備」に基づく「戦争」の一環か？——（2）援蒋ルートの遮断
 - 3・4・1 「計画」は北部仏印進駐のリスクとコストをどのように評価したか？
 - 3・4・2 北部仏印進駐による援蒋ルート遮断の企図は有効に機能し得

- たか？
 - 3・4・3 援蒋ルート遮断を名目とする北部仏印進駐はどの時点から「計画」されたか？ 何を目的に北部仏印進駐は「計画」されたか？
 - 3・5 ドイツ軍の快進撃と勝利の見通しは「計画」の一環か？
 - 3・5・1 「計画」の前提と内容は一貫したか？
 - 3・5・2 ドイツ軍快進撃の帰結は的確・適切に予想されたか？
 - 3・6 南京攻略後の漢口・広東の攻略、さらに重慶・成都の攻撃は、何を目指したか？ 日中戦争開始以前からの「計画」の一環か？——（1）漢口・広東の攻略
 - 3・6・1 国民政府を相手にせずの近衛声明（一九三八年一月一六日）は「計画」の一環か？
 - 3・6・2 徐州、漢口、広東へと順次進展した大幅な戦線拡大のどこまでが「計画」の一環か？ 所期の目的は何であったか？ 目的は達成したか？
 - 3・6・3 東亜新秩序建設の近衛声明（一九三八年二月二日）は

ジャーナリストの仕事

原剛「コーディネーター」
第一線の記者が、自らの体験をもとに、取材動機と方法論を紹介。石橋湛山記念早稲田大学ジャーナリズム大賞記念講座講義録③ 1890円

ミクロネシア

小さな島々の自立への挑戦
松島泰勝 大國支配からの自治・独立を求めたミクロネシアの人々。觀光のイメージを払拭して新しいアジアネジをを描く。アジア太平洋研究叢書⑥ 3990円

現代日本の 東南アジア政策

1950-2005
波多野澄雄・佐藤晋 半世紀を越える日本の東南アジア外交の軌跡・政策開発資料を消長を、豊富なる公開資料を活用して検証する。アジア太平洋研究叢書⑦ 4095円

国際マクロ経済学 の新展開

秋葉弘哉 国際金融論で世界的注目を浴びている為替レート動向、通貨危機、金融統合等のテーマを取り上げ、実証分析を交えた斬新な結論を導き出す。5040円

ライフサイクル 産業連関分析

中村慎一郎編 廃棄段階までを含めた最新の産業連関分析を試み、製品のライフサイクルを巡る理論と実践を提示。早大現代政治経済研究所研究叢書⑦ 3990円

早稲田大学出版部

169-0071 東京都新宿区戸塚町1
番 03-3203-1551 / 価格は税込
http://www.waseida-up.co.jp

「計画」の一環か？

3・6・4 徐州、漢口、広東へと順次進展した大規模な戦線拡大は、想定外、「計画」外であり、大失敗ではないか？

3・7 南京攻略後の漢口・広東の攻略、さらに重慶・成都の攻撃は、何を目指したか？ 日中戦争開始以前からの「計画」の一環か？——(2) 重慶・成都の攻撃

3・7・1 先送りされた対ソ戦備充実要求が日中戦争継続要求と衝突しなかったか？

3・7・2 日中戦争と陸軍の「本格的軍備充実計画」および海軍の「画期的補充計画」

3・7・3 対ソ関係の緊張が日中戦

争に具体的に影響しなかったか？

3・7・4 対ソ戦備・戦力の状況およびそれに起因する制約が厳しく日中戦争を条件づけなかったか？

3・7・5 「和平工作」、対ソ戦備、および航空機による重慶・成都の攻撃などのいずれが「計画」に基づいたか？

3・7・6 重慶・成都(奥地)の集中爆撃は「計画」の一環か？

3・8 日中戦争初期の「計画」は的確だったか？「準備」は周到だったか？

3・9 「通念」では、陸軍が「計画的な準備」に基づき「戦争」の開始・展開を主導したのではなかったか？ 航空機の果たした役割が大き

かったこともあり、太平洋戦争期はもちろん、日中戦争期においても早い時期から海軍が目立った役割を果たした。いずれかの時点で役割に変更があったか？「計画」および「計画的戦争準備」は役割変更の影響を受けたか？

3・10 なぜ途中で止まらなかったか？止まれなかったのか？ いずれかの段階で「和平」が成立したとする。「和平」内容は維持可能だったか？

「ロベスピエールはどのような人だったか……」

「あんな戦争はすべきでなかった」

「さっさと止めるべきだった」「われわれもひどい目にあっただが、周辺諸国の人たちにはなほだしい迷惑をかけた」などと判断に異議を挟むつもりはない。しかし、「なぜあんな戦争をしたのか?」「なぜ止めなかったか?」と問い、さらに「起源・原因は何か?」「有効かつ適切な再発防止策は何か?」「現状のままではよいのか?」と問い始めれば、先の戦争の起源・原因、拡大メカニズム、制御不能のまま長期間にわたる「彷徨状態」から脱出できなかった理由などに関する冷静な検討が不可欠であることに気づくはずだ。拙著を読了した読者は、「一部の悪者が仕組んだとする回答に安住するのは、『臭いものにフタ』のようなもので危険だ」と痛感するだろう。人間は「一部の悪者」を「見つけて」安堵・安心する傾向が強いこと、条件を整えば「一部の悪者」がいつの間にか登場することにも気づくはずだ。

Pascal の言うとおり「すべての人は『これはよい、これは悪い』と判断することによって (……) 自分を神にしている。」

Montaigne が忠告したように、「判断がある方向に傾いてしまうと、話もそのほうへ歪曲されずにはすまなくなる。」

ドイツ軍による銃殺 (一九四四年六月) までのレジスタンス運動期間中に歴史家 Marc Bloch が、右の二つの文章を引用しながら書き残した次の文章でこの広告紹介文の連載を終えよう。

ロベスピエール派にも反ロベスピエール派にも勸弁願いたい、お願いだからごく単純に、ロベスピエールがどのような人だったかを言っしてほしい。(Robespierriistes, anti-robespierristes, nous vous crions grâce: par pitié, dites nous simplement, quel fut Robes-

pierre.)

* 今回を含めた四回の連載は三輪芳朗『計画的戦争準備・軍需動員・経済統制——続『政府の能力』』(二〇〇八年三月下旬、有斐閣から刊行)の広告紹介文である。なお、本書の第7章『物資動員計画、生産力拡充計画(政策)、経済統制』は、『経済学論集』第七三巻第三号(二〇〇七)、第四号(二〇〇八)として別途に公表した。前号までに掲載の「1『軍部の暴走による先の戦争……』」「2『計画的戦争準備』?」「3 赤い鳥小鳥、なぜなぜ赤い、赤い実を食べたは有斐閣ホームページ (<http://yuhikaku-nibu.txt-nifty.com/blog/>) からダウンロード可能である。

(主著)『日本の企業と産業組織』、『政府の能力』、『産業政策論の誤解』(共著)、『The Fable of the Keiretsu. (共著)』、『経済学の使い方』(共著)など。

(みわ、よしろう)＝

東京大学大学院経済学研究科教授